

筑波大学日本文学会会報

第25号

2001年2月

西暦・旧暦・新暦	（清登典子）	一
日本文学会だより		三
研究室だより		五
新刊紹介		九
卒業生だより		十三
日本文学会教官学生名簿		十六

西暦・旧暦・新暦

清 登 典 子

年の暮れから年始にかけては、過ぎた一年を振り返り、歳月の流れる早さをしみじみと実感させられる時期である。さらに今年は西暦二千年ということで、二十世紀が終わり二十一世紀を迎える節目の年として、百年、千年を単位とする長い時の流れを意識させられることが多い。二十世紀を締めくくるさまざまな行事やイベントが盛り上がりを見せ、さまざまなところで「二十世紀最後の」という形容詞が使われているのを目にすると、私たちの暮らしの中に西暦がすっかりとけ込んでいることが改めて思われる。

周知のように、西暦はキリストの生誕の年を元年としてそれ以後の年数を刻んでいくものであるが、一年を三百六十五日とするなど、基本的に太陽の運行に基づく太陽暦が採用されている。これに対して日本では、古来から月の満ち欠けを基本とする太陰暦（今日では旧暦と呼ばれる）が用いられていた。日本で太陽暦が採用されたのは、明治五年十二月三日からであり、この日を明治六年（一八七三）一月一日として西洋の暦の日付に合わせて以来のことである。つまり、この時点で旧暦と西暦（新暦）との間にあった一ヶ月近くのずれを西洋の暦に合わせる形で一挙に解消したことになる。

この暦の改変は文学にもさまざまな影響を与えることになった。とくに俳諧、俳句の世界には大きな打撃を与えた。というのも、旧

暦においては厳然と存在していた月日と季節との一致が、新暦では崩れてしまったからである。旧暦では、基本的に一月、二月、三月が春、四月、五月、六月が夏、七月、八月、九月が秋、十月、十一月、十二月が冬という具合に、一年が春夏秋冬という季節のめぐりに一致しており、新しい年が来ることは、そのまま新しい春を迎えることでもあった。年賀状に「新春」や「迎春」などと書くのはその名残である。

ところが、新暦では一月はまさに冬本番の時期であり、春として捉えることはむずかしい。こうした季節のずれに配慮して、今日出版される歳時記では、「春」「夏」「秋」「冬」それぞれの部の外に「新年」の部を設けて、旧暦においては春の部に収められていた新年に関する季語を一括して収めることがなされている。しかし旧暦時代の一月の異称であった「初春」の季語が、「新年」の部と「春」の部の両方に掲載されるなど、その混乱は解消されたとはいえない。一月だけではない。皐月や端午、水無月、七夕など月名や日付の特定される季語については、すべて歳時記における季節の分類と実際の季節との間にずれが生じている。こうしたずれをどのような形で解消するのかは、現代の俳句が抱える大きな課題の一つと言っていいだろう。

実は、暦の改変によってもたらされたものは、月日と季節とのずれだけではなく、旧暦では、月の満ち欠けのサイクルがひと月の単位とされたので、日付と月齢とが一致しており、三日は必ず三日月、十五日は満月であることが約束されていた。したがって古典文学において日付が書かれていれば、それはそのままその日の月齢を示すものとして受け取る必要がある。『奥の細道』の旅立ちの日が「弥生も末の七日」と書かれていることは、単に三月二十七日に出立したという事実を示すだけではなく、芭蕉が出立した二十七日早朝には、前日二十六日の月が、細い細い下弦の月の姿で、有明の月として西の空に残っていたことをも示しているのである。しかし、太陽暦の採用とともにこの日付と月齢との一致も崩れることとなってしまった。

さらに、月の満ち欠けのサイクルをもって一月とし、季節のめぐりをもって一年とする旧暦には、循環する時間という時間感覚が内包されていたと見ることができるのであり、旧暦から新暦への暦の変化は、循環する時間から直進する時間へと私たちの時間感覚をもまた大きく変えるものであったと言えるのではないだろうか。十二月の夜空に澄む月を眺めながら、そんな暦をめぐるあれこれを考えているこの頃である。

(平成十二年十二月)